スピリチュアリティと倫理

黒木幹夫

はじめに（問題提起）

スピリチュアリティについては最近、さまざまな方向から論議がなされている。[1] スピリチュアリティ論議が広がりをみせるようになったのは、直接には一九九〇年代に世界保健機関（WHO）において、健康の定義にスピリチュアルという用語を加えるという提案がなされたことがきっかけである。しかしそれはあくまで直接のきっかけであって、論議の広がりの背景にはそれなりの準備段階があった。スピリチュアリティが注目を集めるようになった背景には、それにふさわしい歴史的な経緯[2]があったわけである。この歴史的な経緯は実は、いわゆるふつうの人々のものの考え方（感じ方）の変化と密接に連動している。

ふつうの人々のものの考え方（感じ方）の変化にかかわる歴史的な経緯としては、さまざまな時代的な動向があげられる。例えば超常現象（超能力）に対する関心の高まり、気のブーム、尊厳死を始めとして死をどうとらえるかという問題提起、等々である。これらの時代的な動向はすべて、修行やターミナルケアの実践というような、なにがしかの実践体験に基づいている。スピリチュアリティへの問いは、このような実践体験のなかから生まれてきたものにほかならない。

そのような実践体験が重視される背景には、現代におけるふつうの人々のものの考え方（感じ方）の変化がある。

超常現象に対する関心は、科学的には検証できない、目には見えないものに対する、人々の何らかの実感に裏付けられている。また気のブームは、人間は生のエネルギーを宇宙と共有しているとする、人々の自覚がもたらしたものである。さらに死にかかわる問題提起は、死は単に生の終わりではなく、それ以上の深い意味を有しているという人々の直観に基づいている。これらに共通しているのは、ふつうの人々の新たな気付きである。

スピリチュアリティが注目される背景には、このように、目には見えないもの、宇宙とのつながり、さらには死に対するふつうの人々の新たな気付きがある。したがって、スピリチュアリティとは何かを理解するには、まずこの新たな気付きが何を意味しているのかを明らかにすべきである。不可視のもの、宇宙とのつながり、そして死は、いったいどのような連関において新たな気付きへともたらされたのであろうか。

新たな気付きとは、それまで気付かなかったものに対して新たに気付く、ということにほかならない。なぜこれまで気付かなかったのか。それは端的に言えば、隠されていたからである。「不可視のもの」は無視して然るべきものであったし、「宇宙とのつながり」は人間が理性的に追えるようなことではなかった。また「死」に関しては、死を忘れて生きることこそが人間の実態だったのである。それではいったい何が隠していたのか。われわれ自身がである。われわれは何の反省もなく、目に見えるもののみを信じ、宇宙の支配者のようにふるまい、生のみが賞賛するに値すると思いこんできたのである。

このような近代以降の人間の勝手な思いこみが、今や崩れつつある。スピリチュアリティが注目されると同時に、人間とは何かに関して、実は新たな気付きが起こっている。人間性について見直しが図られつつある、と言ったほうがよいかもしれない。この見直しによって提起される新たな見方は、当然のことながら、人間としていかに生きるべきかという倫理の問題とかかわってくる。スピリチュアリティについて考えることは、倫理を深く反省することに通

じるのである。本論の題目を「スピリチュアリティと倫理」としたゆえんである。

第一章　人間性の危機と新たな気付き

人間性に対する思いこみが崩れつつあるならば、これまで人間性はいったいどのように理解されてきたのか。それは要するに、目には見えないもの、宇宙とのつながり、さらにはみずからの死までをも隠蔽することで成り立つ、そのような人間性の理解であった。近代以降の人間観は、近代社会を担うにふさわしい人間を、人間のモデルとしてとらえた。近代社会を担うにふさわしい人間とは、社会を合理的に建設してゆく社会的存在つまりは社会人のことであり、具体的には健康な壮年男子にほかならない。いわゆる働き盛りの男である。

そのような人間観において、健康に価値があるとされれば、死はおのずから消極的なものとなり、果ては忘却される。また合理性が追求されれば、目には見えないものというような非合理的なものは、当然のように軽視される。さらには、社会こそが自分が存在するすべてとなれば、宇宙的なものというような、社会を超えた広がりなどは視野に入ってこなくなってしまう。結果として、社会に存在しうる期間、すなわち生まれてから死ぬまでの間が人生のすべてとなる。しかもそのうちで、社会に貢献しうる壮年の期間のみが、社会的に価値あるものとされる。生きている間のしかもわずかな時間だけが、社会的な価値評価の対象となるのである。

生まれてから死ぬまでが人生であるとは、ある意味では、ごくあたりまえな人間理解である。しかし、ほんとうにそうなのであろうか。人間性に対する新たな見方は、このあたりまえな人間理解に対して見直しを迫る。生まれてから死ぬまでが人生であるならば、その人生は「どこの誰それ」という固有名詞によって色付けられることになる。し

かしそのことから、自分の人生は自分のもの（所有物）であるという誤解が生じる。その誤解からさらには、自分が目にすることのできるもののみが信頼に値するものとなり、生のみが賞賛されるようになる。結果として、死を忘れるかたちでしか生きざるをえなくなる。また自己の主体性のみが強調され、共存の意識が失われる。

ところで、自分の人生は自分のものであるとみなし、生に執着し、自分の目に見えるもののみを信じ、主体的に生きることは、果たしていけないことなのであろうか。一方で、そういう生き方をあたりまえとして人間が生きてきたことが、まさに現代における倫理観の揺らぎをもたらしていることに、いまさらのように人々が気付き始めた。その意味では、スピリチュアリティが注目される経緯と、現代のわれわれにおける倫理観の揺らぎとは、軌を一にしているわけである。むしろ、倫理観の揺らぎとバランスをとるかたちで、スピリチュアリティが注目されるようになったと言ったほうがよいかもしれない。

人間が「いかに生きるべきか」という倫理の問題は、自分の人生は自分のものであるという観点からは、決してとらえることができない。なぜならそこには、他者の存在が欠けてしまっているからである。また生きるということは、生の最終に死があるかぎり、死を抜きにしては生の意味は語れない。死は生を逆照射するものだからである。つまりは、自分の人生は確かに自分のものであるが、しかし自分だけのものではないという視点が、倫理の問題を考えるときにはぜひとも必要である。しかも、自分の人生は「自分だけのものではない」と言うとき、そこには自分を超えた、目には見えない、非合理的なものの存在が想定されざるをえない。

自分の人生は自分だけのものであるという錯覚は、見てきたように、自分の人生を生まれてから死ぬまでの間に限定することによって生じる。そうであれば、自分の人生は自分だけのものではないという自覚は、自分の人生を生から死までの間に限定しないことで可能になるはずである。生まれてから死ぬまでというのは、実は自分の人生の部分

でしかない。なぜならば、自分は両親によって生まれたのであり、その両親はそのまた両親というように、生の連鎖は永遠に過去に遡りうるからである。要するに、つながりのなかにあるのが人の「いのち」であり、そのいのちは「与えられたもの」と言うよりほかはない。その人の生まれる前というのは、確かに目に見えるかたちでは存在しない。しかしこのように、いのちのつながりを無視するわけにもゆかない。このいのちのつながりは、当然のこととして、宇宙とのつながりを予想する。

目には見えない生まれる前というのを前提にしないかぎり、生（いのち）は成り立ちえない。それが与えられた「いのち」ということの意味である。そうであれば、人間が誕生するということは、始まりであると同時に継続でもあるということになる。同じように、生の終結としての死は、なるほど個体の終結ではあるが、しかしそれだけではないということになる。与えられた「いのち」における継続の契機が、それによって失われるわけではないからである。この継続の契機は、どのように理解されるべきであろうか。

われわれは人生の最後にみずからの死を体験するが、しかしそれを意識化することはできない。意識化する前に現実に死を迎えており、その死は同時に意識の消滅を意味するからである。したがって、与えられた「いのち」の死後の継続については、それを合理的に説明することは不可能である。しかしながら生がある間は、与えられた「いのち」にかかわる継続は、死後の世界に対する関心として人々に実感される。その関心に基づいて、宗教は死後の世界を再生として説く。

生まれてから死ぬまでの間は、その人の人生の部分でしかない。生まれる前と死んだ後とを考慮に入れてこそ、その人の人生は全体として了解される。このように、みずからの人生を全体としてとらえたい、したがって全体的な存在として生きたいという欲求が、人間には本能的に備わっている。この本能的な欲求を、さしあたりスピリチュアリ

ティと呼ぶことができる。人間性に対する新たな気付きとは、そのようなスピリチュアリティの再確認にほかならない。この気付きは、与えられた「いのち」という実感がもたらしたものである。与えられた「いのち」とは、いのちは「与えられたもの」であり、言い換えれば、われわれは生を与えられていることになる。生かされているわけである。われわれは生まれてから死ぬまでを生きると同時に、しかし全体としては何ものかによって生かされているのである。

人間性の危機は具体的なかたちでは、人間における倫理観の揺らぎに現れている。その揺らぎはしかし、人間がみずからの人生の全体を、生まれてから死ぬまでの間にすぎないと錯覚することによって生じたものである。その揺らぎに平衡を与えるかたちで、人々の関心は「不可視のもの」、「宇宙とのつながり」そして「死」に向いていった。そのことは同時に、人間性に対する新たな気付きを意味していた。つまりは、生まれてから死ぬまでの間は単に人生の部分にすぎなく、人生の全体は生まれる前と死んだ後とを含むより包括的なものである、ということに気付いたのである。

人間性に対する新たな気付きは、与えられた「いのち」ないしは「生かされている」ということに集約される。与えられた人生において、それを与える主体は「不可視のもの」として表象される。また「死」は、死後を予想させるものとして了解される。さらに、生まれてから死ぬまでの間、人間は一定の社会にかかわる。それに対し、生まれる前と死んだ後とを含む人生の全体に関しては、社会よりも包括的な概念が必要とされる。それが宇宙であり、人間は社会的な存在であるばかりでなく、同時に宇宙的な存在なのである。その宇宙的存在は「宇宙とのつながり」において基礎づけられる。

第二章　新たな気付きとスピリチュアリティ

思想史的に見れば、以上に述べてきたような、人間性に対する新たな気付きが背景となって、現在はスピリチュアリティが注目されている。それが注目されるのは、人間性に対する新たな気付きに基づいて、人間性についての新たな見方が模索されているからである。その新たな見方は、当然のこととして、人間性すなわち人間の本性をどう再定義するかにかかわってくる。要するに、その再定義にかかわって、意識的あるいは無意識的に、スピリチュアリティという概念が使用されているわけである。

したがって、スピリチュアリティとは何かと問うことは、本来あまり意味をなさない。重要なのは、人間性の再定義に関して、どのような問題点を処理するためにスピリチュアリティ概念が使用されているのか、これを明らかにすることである。スピリチュアリティは通常「霊性」[3]と訳される。その訳語から類推されるように、スピリチュアリティという概念は人間の本性にかかわる。その意味で、人間に本能的に備わる、全体的な存在として生きたいという欲求を、さしあたりはスピリチュアリティとみなすことができる。しかし重要なのは、そのようなスピリチュアリティの定義ではなく、あくまでもその概念が使用される場面ないし状況のほうである。

すでに考察してきたところによれば、スピリチュアリティ概念は、次の三つの問題点を処理するのに有効である。一つは、人間の再定義にかかわる基本的な前提として、誕生以前と死後とを含む人生の全体をどう視野に入れるかということ。いま一つは、その基本的な前提を踏まえ、「不可視のもの」、「宇宙的なつながり」、そして「死」をどう位置づけるかということ。そして三つ目に、そういう人生の全体にあっては、生きるというよりも、むしろ「生かされている」ということになるのではないか、ということである。

言うまでもなく歴史的には、以上の三つはすべて、これまでは宗教がかかえてきた問題点にほかならない。宗教は「聖」という概念によってそれらを処理してきた。ところが近代以降は、社会が全体として世俗化し、社会における存在としての宗教もその例外ではなくなった。既成宗教は世俗化を免れえず、社会的存在として制度的宗教に徹することこそが、それが生き残る唯一の道となった。世俗化とは、「聖」が俗にのみこまれることを意味する。そのことによって既成宗教は、もはや「聖」にかかわる三つの問題点を処理できなくなり、したがってそれらは一人一人の信仰の問題として棚上げされざるをえなくなったのである。

現代においてスピリチュアリティが注目されるのは、世俗化した既成宗教には不可能になってしまった三つの問題点の処理を、スピリチュアリティが可能にしてくれるかもしれないという期待があるからである。その期待と、人間性を再定義しようとする動きとは、実は表裏一体である。人間性の再定義は、近代以降に支配的になった世俗的な人間観に対して、新たな見方を提供するものにほかならない。

人間性を再定義するとは、「人間であること」を新たにどう理解すべきかということである。近代以降に支配的になった世俗的な理解は、人間を近代社会における人的資源としてとらえた。人的資源とは社会的存在のことであり、いわゆる社会人ということである。近代社会は、このような社会的存在としての人間のあり方を、人間の理想としてきた。それが理想とされてきた背景には、中世までの神への信仰に代わる、近代における人間の理性への信頼がある。「人間とは何か」を考える上で理性が合理的に取り扱うことができるのは、当然ながら、その人間の誕生から死までの間だけである。誕生以前と死後に関しては、それは非合理的なものとして、理性が取り扱う範疇の外におかれる。そして、誕生から死までの間は一定の社会に属するゆえに、社会的存在が重視されることになる。

スピリチュアリティ概念が提起されたのは、要するに、そのような近代的な人間観がいかに虚構に満ちたものであ

るか、これをあらわにするためである。人間とは何かという問いは、具体的には、「人間であること」とはどういうことかを問うことにほかならない。しかしながら、「人間であること」を問題にしようとするなら、まずは「人間であること」の前提となる事態を明るみに出しておかなくてはならない。

「人間であること」の前提として、それを基礎づけるものがある。何が基礎づけるか、それは「人間があること」がである。何となれば、その人間が存在することが前提となって初めて、その人間が「人間であること」の意味が問われることになるからである。「人間であること」の前提には、したがって「人間があること」がおかれるべきである。ところが、人間が「ある」という場合、その「ある」は「生きる」と同義である。この「生きる」に関しては、すでに見てきたように、与えられた「いのち」ということが考慮されなければならない。人間は生きると同時に、しかし「生かされている」わけである。

与えられた「いのち」において生かされているのが人間であるならば、「人間があること」に思いを致す場合には、必ずそこに「どこから、どこへ」という視点が入り込んでくる。したがって「人間であること」は、それが「人間があること」を前提としているかぎりは、「どこから、どこへ」という問いを必然的に含む。「どこから、どこへ」とは、言い換えれば、誕生以前と死後の問題にほかならない。このように、「人間であること」はすでにそれ自体として、非合理的なものを内に含んでいるわけである。

近代的な人間観の虚構性は、人間とは何かを考える上で、「人間であること」の前提としての「人間があること」を無視し、それを社会的存在に限定した点にある。そうすることによって、「人間であること」を「問題」として措定し、合理的に取り扱っていこうとした。そこから排除されたものは「どこから、どこへ」であり、誕生以前と死後の問題はまさに非合理的なものにほかならない。近代的な人間観はしたがって、非合理的なものを人間にふさわしか

らざるものとみなし、それを「神秘」として遠ざけたのである。

ところが「人間とは何か」という問いは、それを問う自分自身が人間であるかぎり、「自分とは何か」という問いに限りなく還元されてしまう。また「自分とは何か」は、自分を体験することを通してしか答えることができない問題である。さらに自分を体験するとは、現実に生きるということをおいてほかにはない。生きるということは、しかし同時に、「生かされている」ことでもあった。近代が遠ざけた神秘を抜きにしては、自分自身を体験することさえ不可能になってしまうわけである。

近代は人間を「問題」として理性的にとらえようとした。普遍的に、と言い換えたほうがよいかもしれない。そこにおいては、自分が生きるという具体的かつ個人的な体験は、考察の妨げになる以外の何ものでもなかった。思想史的にはいわゆる実存主義がそれに最初の異論[4]を唱えたわけであるが、スピリチュアリティの議論は系譜的にはその異論の延長上にある。しかしスピリチュアリティ概念が提起される背景としては、自分の体験にこだわり、その奥底に本来的自己を見出したユングの功績を見逃すわけにはゆかない。

それはともかく、近代的な人間観の虚構性は、すでにさまざまなかたちで気付かれていた。それを踏まえ、スピリチュアリティ概念が提起されることによって、人間性の再定義が模索されている。その模索は主として、近代が遠ざけた「神秘」を復権させようとする。一人一人の人生を、誕生以前と死後とを含んだ、その全体としてとらえようとするわけである。そのような全体としての人生はしかし、与えられた「いのち」ということによってこそ可能になる。与えられた「いのち」とはいのちのつながりにほかならないが、それは具体的には人間と宇宙とのつながりとして表象される。一人一人は、一方で社会的存在として「生きる」と同時に、他方で宇宙的存在として、宇宙とのつながりにおいて「生かされている」わけである。

スピリチュアリティが提起されることによる人間性の再定義は、このように、「人間であること」を「どこから、どこへ」を含む全体としてとらえようとする。しかし再定義であれ、定義自体は、実は単に理論的なものにすぎない。重要なのは、その再定義によって、われわれの実践体験がかかわりうる、どのような人間観がもたらされるのかということである。「人間であること」（人間として生きること）がいくら理論的に明らかになっても、それが人間の生き方に具体的にかかわらなければ何の意味もないからである。いかに生きるべきか、すなわち倫理の問題である。

第三章　人間性の危機と世俗化の動向

「人間性の危機」が叫ばれて久しい。しかしながら、その危機が叫ばれている人間性とは何か。これまではさしあたり人間性を、文字通り人間の本性すなわち「人間であること」と理解してきた。ここではもう少し具体的に、「人間の個性」と言い換えてみる。さらに、そこにおける「個性」を英語のIndividualityの意味でとらえれば、その語源は「分けられないもの」である。「個性」とはすなわち「全体性」の謂いにほかならない。「人間性」とはしたがって、人間の全体性を意味することになる。要するに、人間において分割することの不可能なもの、その人の全体性、すなわち人間らしさが人間性なのである。

人間性の危機とはしたがって、具体的には人間の全体性、すなわち人間らしさの危機にほかならない。そして危機は、その全体性が崩れ、部分へと分割される動きとして示される。分割とは、事柄に即して言えば、まず誕生から死までを理性が取り扱いうる「問題」とし、次に誕生以前と死後とを「神秘」として、さらに両者を分断することを意味する。社会学に「分割統治」[5]という概念があるが、要するに近代社会は、「問題」と「神秘」とを分割することを

通して、人間を社会的存在として統治（支配）してきたのである。それは世俗化の動向と軌を一にしている。

世俗化とは、図式化して言えば、「聖」が「俗」にのみ込まれる状況をいう。聖は俗を超えたものであると同時に、しかし俗を活性化するものとして存在している。[6] 例えば祭りは、非日常性としての聖が日常性としての俗と交わり、それによって日常性が活性化される具体的な場面である。その意味で聖は、横軸としての俗にけじめをつけるためにそれに交差する、縦軸として表象される。この座標軸が崩壊することを世俗化という。世俗化と同時に、祭りは実質を失い、次第に形式化していくことになる。

一方で聖は「聖なるもの」[7]として、少なくとも中世までは、人間に「いのち」を与えるものとの関連で機能していた。「聖なるもの」を具体的にどう表象するかは、それぞれの宗教の性格規定によって異なってくる。しかし宗教が世俗化されると同時に、その表象もやはり形式化し、実質を失ってゆく。結果として、宗教は社会的存在としての機能しかもちえなくなり、かろうじて制度的宗教として生き残ることになる。

ところで、このように社会が世俗化している時代に、なぜスピリチュアリティのようなものが注目されるようになったのであろうか。それはようやく現代になって、人間本来の「自己治癒」力が目覚めたからである。その自己治癒力とは、言い換えれば、みずからの人間らしさを回復する力のことである。人間は近代以降、人間らしさを失ってきた。人間らしさは人間の個性にほかならないが、その個性はすなわち全体性を意味している。

「聖」が見失われ、社会が世俗化することによって、人間は社会の部分を構成する社会的存在となった。しかもそれが人間のありようのすべてとなった。社会の一部として、部分的存在であることが、すなわち「人間であること」の意味となったのである。社会的存在とは、具体的には、全体としての社会に奉仕する存在のことである。ここには、「人間であること」と、社会における人的資源との同一化が認められる。

しかし西洋の精神史を例にとれば分かるように、人間は少なくとも中世までは、大宇宙に対応する小宇宙として、それ自体が全体的存在であった。そして人間存在の位相は、横軸としての「俗」が、縦軸としての「聖」と交差する座標軸にあった。人間が小宇宙であることにならえば、人間らしさを回復するには、まずもって世俗化によって見失われた縦軸としての聖を取り戻さなければならない。しかしその聖はもはや、近代以降の社会の世俗化によって、人間の外としての社会には求められない。そうであれば、人間の内に求めるしか道はない。そこにおいて、全体的な存在として生きたいという、人間に本能的に備わる欲求すなわちスピリチュアリティが、内面における縦軸としての聖の役割を果たしうると確信されたのである。

人間における本来の自己治癒力が目覚めたということは、人間性の危機に際して、内面における縦軸としての聖が再機能し始めた、ということを示している。そのことが実は、スピリチュアリティの問題として提起されているわけである。内面における聖としてのスピリチュアリティは、「いのち」を与えるものとしての「不可視のもの」、「誕生以前と死後」等に積極的にかかわることによって、人間ないし人生を全体としてとらえることを可能にする。その意味における人間らしさの回復である。

ところで、スピリチュアリティを通して、内面における聖が再機能し始めたということは、人間自体は奥深いところでは容易には世俗化しえないという事実を示している。宗教が本来果たしてきた役割は、社会の世俗化における宗教の制度化によって、もはや宗教が担えるようなものではなくなってしまった。その役割を、今やスピリチュアリティが人間の内面において引き受けつつある。その意味では宗教の制度化が進めば進むほど、本来の宗教はスピリチュアリティの問題としていよいよ内面化、そして個人化せざるをえないことになる。

しかしながら一方で、人間の内部において、世俗化が進行していることもまた事実である。そのことは具体的には、

現代に生きる人間が、物質的に豊かになればなるほど、逆に精神的には貧しくなってきている事態に明らかである。予想される結果としては、端的に言えば、人間における内面性の欠落である。社会の世俗化に対応するかたちで、人間は社会的存在であることがすべてとなった。社会的存在は、社会のために生きている。したがって、たとえ自分の内面を犠牲にしてでも、社会に奉仕しなければならない。

このように、現代に生きる人間においては、物質面と精神面とが反比例の関係にある。近代化によってもたらされた物質的な豊かさのなかで、外面(社会的な面)にばかり豊かさが求められ、内面がおろそかになっている。それは、豊かさの基準が、人間の外側におかれているからにほかならない。人間は、みずからの内側を見なくなってしまった。いや、見ようとしなくなった、と言ったほうが正確かもしれない。

そのことを証左するかのように、現代の人間にとっては、こころは感情と同義である。例えば犯すべきではないことを犯してしまったことの弁明として、「カーッとなってやってしまった」とよく言われるように、彼らのこころは、外界に対して条件反射的に反応する感情の次元でしか機能していない。こころが感情と同一視されるところでは、自分というもの(自我)はもはや存在しえないし、ほんとうの自分(本来的自己)を求めるというようなことも生じえない。要するに、自分自身が自分の人生の主人公たりえない、ということである。

人間性の危機は、その具体的な実例が自分にあるかぎり、実は自分の危機にほかならない。内面性の欠落に基づいて、自分を失うという危機である。人間は社会的存在に一元化されれば、自分を失うことになる。したがって、均衡が大事である。均衡とは、二元性を保つ、ということである。それでは、二元性におけるもう一方とは何か。何が社会的存在への一元化に対する防波堤となるのか。すでに述べてきたように、それこそが、宇宙とつながっている自分にほかならない。人間が小宇宙とみなされてきた歴史をふまえ、それは宇宙的存在と呼ばれる。

人間は社会的存在としては、社会の部分として、社会のために生きている。しかし同時に人間は、誕生以前と死後とを含む宇宙的存在としては、それ自体が全体である。全体であれば、自分以外から意味を付与される必要はなくなる。人間は、「いのち」を与えられた宇宙的存在としては、存在することすなわち生きることがそれ自体で意味であり、価値であり、また目的である。したがって、決して自分以外のもののために生きているわけではない。宇宙的存在としては、人間は自分のために生きているのである。

このように、人間性の危機は人間の社会的存在への一元化に集約されるが、それはまさに自分自身の危機にほかならない。したがって、危機に直面するなかでスピリチュアリティ概念が登場したのであれば、それは人間の宇宙的存在への目覚め、すなわち自分のために生きたいという人間の叫びと連動しているはずである。スピリチュアリティ概念は、人間の再定義にかかわって提起されている。それは、社会的存在に一元化されている近代的な人間の見方に対して、人間は宇宙的存在に支えられた社会的存在であるべきことを主張しているのである。

第四章　「人間であること」の意味とスピリチュアリティ

「人間であること」の意味については、これまでにもふれてきた。ここで確認しておきたいのは、姿形が人間であるから、それでもって「人間であること」が保証されるわけではない、ということである。生物学的な意味で人間として誕生したということと、「人間であること」とはもともと別なことである。前者は生物学的な事実以上でも以下でもないし、後者はそれ以上のものを示しているからである。

みずからを反省する能力を有するのが、人間という生物である。そうであれば、まさに人間である自分自身を通し

て「人間であること」の意味、つまり人間として「ある」（「生きる」）とはどういうことなのか、これをみずからに問うことは、人間にとって至極〈あたりまえ〉なことである。〈あたりまえ〉とは、人間はそのことをすべきであり、それをして当然という意味である。

したがって人間というものは、「人間であること」の意味をみずからに問うてこそ、まさに人間であるということになる。人間らしさないし自分らしさの本質がここにある。またそのように問うことは、人間にとってそうすべきであるという当為として存在し、あらゆる当為の原点がここにある。その意味で、人間らしさの本質は、人間が踏み行うべき道としての倫理の問題と深く関係していることになる。

しかしながら大勢から言えば、〈あたりまえ〉なことが〈あたりまえ〉ではなくなってしまったのが現代に生きる人間にほかならない。現代社会において道徳や倫理が揺らいでいることが、そのことを如実に示している。現代の人間は、「人間であること」の意味をみずからに問うことをしなくなった。言うまでもなくそれは、「人間であること」の意味がすでに実現されているから、その必要がなくなったということでは決してない。実態はその逆である。「人間であること」すなわち人間性の意味をみずからに問うことが、現代の人間にはどんどん難しくなりつつあるのである。まさに、人間性の危機と呼ばれるにふさわしい事態である。

みずからに問うことが困難になったのは、言ってしまえば、問われるべき〈みずから〉としてある自分自身が、確固たるものとして存在していないからである。「人間であること」の意味は、基本的には、あくまでも自分自身が「人間であること」の意味であって、それは自分自身を起点とすることによってしか問われえない。問われるべき自分自身が存在しなければ、「人間であること」の意味も問われようがないわけである。

現代の人間が「人間であること」の意味をみずからに問うことができないのは、言い換えれば、自分が「自分であ

ること」の意味が見えていないからである。人間という概念自体はそもそも抽象的なものであって、自分が「人間であること」の意味は、自分が「自分であること」の意味を通してしか具体的に問うことはできない。しかし、自分が「自分であること」の意味とはどういうことであろうか。要するにアイデンティティということになるが、それは他とは異なる自分、他によっては置き換えられない自分を体験してみて初めて明らかになることである。

このように、かけがえのない自分を体験できてこそ、自分が「自分であること」、さらには「人間であること」の意味を了解しうるようになる。しかしながら一方で、現代の人間は、かけがえのない自分というものを容易に体験できないような状況にある。人間同士の置き換えが〈あたりまえ〉のように行われるのが、現代の社会にほかならないからである。そこでは、社会的存在（社会人）としての意味ないし価値は、誰にでも平等に与えられている。ところが、自分がある社会的役割にふさわしくないと判断されれば、自分は容易に他者と置き換えられてしまう。置き換えがきくのは、現代の社会にあっては人間が平均化されているからである。

したがって人間が平均化されているところでは、かけがえのない自分などというものは体験しようにも体験しえない。また、かけがえのない自分ということに気づくことがなければ、自分が「自分であること」の意味をみずからに問いかけることもありえない。さらには、問いかけられる自分自身が存在しなければ、人間である自分を起点として「人間であること」の意味に思い悩む必要もなくなってしまうわけである。

「人間であること」の意味をみずからに問えない現代の人間は、そのように問うことにこそ人間らしさの本質があるとすれば、まさに人間性の危機に陥っていると言える。またそのように問うことが、人間にとって然るべきことであるならば、現代の人間は人間として踏み行うべき道、すなわち倫理を外れていることになる。そうであれば、人間性の危機はまさに倫理の危機にほかならないことになる。

そのような現代の人間が人間らしさを取り戻し、倫理を回復するにはどうしたらよいのであろうか。述べてきたように、「人間であること」の意味は、自分が自分であり、その自分が人間であるという事実を通してしか認識されえない。人間らしさとは、結局は自分らしさということでしかありえないからである。要するに、「人間であること」の意味は、体験的にしか理解されえない。かけがえのない自分を体験することしか、おそらくその手だてはないのである。

かけがえのない自分を体験するとは、視点を変えれば、まさにみずからのスピリチュアリティを体験することにほかならない。なぜならスピリチュアリティは、すでに指摘してあるように、自分が宇宙的存在であることへの目覚め、すなわち自分のために生きたいという自分自身の叫びと深く連動しているからである。かけがえのない自分は、宇宙的存在として、まさに自分自身のために生きてこそ確証される。自分のために生きるとは、宇宙とのつながりにおいて与えられた「いのち」を、精一杯に生かそうとすることである。

人間はなぜ自分のために生きようとするのか。それは、「いのち」を与えられているかぎり、人間はそれを生かしていかなければならないからである。与えられた「いのち」という概念は、認識論的には、誕生の契機を説明するものでしかない。したがってそれ自体は、いわば種子のようなものにすぎない。人間は、自分のために生きることによって、その種子に実を結ばせようとする。実を結ぶとは、自分を実現するということであり、自分になるということである。人間が生かされている存在であるかぎり、「自分になること」すなわち「人間になること」は人間性の宿命である。

問題は、自分のために生きるということが、社会のために生きるということと、どう関連するのかということである。それがつまりは倫理の問題にほかならない。「人間であること」は一方で、すでに述べたように、「人間があるこ

と」をその根底としている。しかしながら他方で、「人間になること」が「人間であること」の本質としてある。人間性とは何かは、自分自身を反省することを通して、次のような三層構造で理解されなければならない。まずは「人間があること」、次に「人間であること」、そして最後に「人間になること」である。

この構造を用いて人間性の危機を再確認すれば、それは「人間であること」が、「人間があること」および「人間になること」という二つの支柱を失って、浮遊している状態ということになる。この中空状態は、具体的には、人間における倫理観の揺らぎとして現象している。そのことについては次に述べよう。

第五章　倫理とスピリチュアリティ

現代は、社会における倫理感が希薄になったことを示す事件が、さまざまなメディアを通して日々刻々と伝えられている。またみずからを反省してみても、確固とした倫理観をもちえないのが、正直に言って現代のわれわれである。社会における倫理感が希薄になった背景には、そこに生きる人々における倫理観の揺らぎがある。この倫理観の揺らぎは、しかし何に由来するのか。

倫理とは、言うまでもなく、人間のあり方の基本にかかわるものである。人間は人間固有の共同生活を営むが、そのあり方の原理がすなわち倫理である。人間は一人では決して生きてゆけない。そのゆえに他者を必要とする。要するに、他者とのかかわりにおいて、人間としていかに生きるべきかが倫理の根本問題となる。しかしながら、人間が社会的存在へと一元化されている現代において、われわれがいかに生きるべきかの指標はどこにあるのであろうか。

もしわれわれが社会的存在として社会のために生きているならば、その社会のためになることであれば、それが何

であれ、われわれはそれをすべきである。われわれが何をすべきか、また何が善くて何が悪いのかは、社会が判断することになる。したがって、われわれがしたことの責任は、匿名の社会が担うべきことになる。そうであれば、誰もあえて責任をとろうとはしなくなる。それも理の当然であろう。

ところで倫理とは、そもそも理論の問題であると同時に、しかし基本的には実践の問題である。実践に裏打ちされてこそ、倫理は理論としても機能しうることになる。また、原理としての倫理を裏打ちすべき実践とは、個々の具体的な実践でないことは言うまでもない。それは、原理としての倫理に対応するような原理的な実践のことをいう。人間はなぜ実践するのか。それは第一義的には、共同生活の延長としての社会のためではない。その共同生活自体が〈何のために〉と問われてしまうからである。

それでは、〈何のために〉人間は共同生活を営むのか。それは、誕生とは与えられた「いのち」が、同じく「いのち」を与えられたものと出会う、ということにほかならないからである。「いのち」同士のかかわり合い、具体的には支え合いのなかでしか、人間は生きられない。他者との支え合いなしには、人間は生きられないのである。しかも、その他者は人間であるとは限らない。「いのち」は宇宙とのつながりにおいて存在しているからである。

「いのち」同士の支え合いは、愛として認識される。愛を基礎づけるものも、やはり与えられた「いのち」ということにほかならない。与えられた「いのち」は、相互に支え合うなかで、それぞれの「いのち」を展開してゆく。「いのち」という種子が実を結ぼうとするわけである。その意味において、「人間であること」はすなわち「人間になること」を意味している。「人間になること」とは、共同生活という具体的な場面で言えば、人格の形成がそれにあたる。

「人間であること」の意味は、あくまでも、その人間が「人間になること」にある。そうであれば、「人間であるこ

と」という人間の本性すなわち人間性は、そもそも「人間になること」という実践を含んでいることになる。そのような、「人間になること」という原理的な実践が、ほかならぬ原理としての倫理を裏打ちしているわけである。そしてそのような実践は、言い換えれば「体験」として理解される。体験を積み重ねることが人格形成に具体的につながってゆくからである。

われわれが体験するということもまた、倫理的な意味における実践にほかならない。しかしながら、社会的存在へと一元化された人間には、もはや倫理は体験されえない。彼らには、実践に裏打ちされた倫理などは存在していないからである。なぜ存在していないのか。そもそも彼らには、倫理を裏打ちするような実践ないし体験が欠如しているからである。要するに彼らには、「人間になること」という実践ないし体験が欠けている。社会的存在に一元化されることの代償は、「人間になること」の放棄にほかならない。

「人間であること」の意味は「人間になること」にあり、具体的には人格の形成として理解される。しかしながら「人間であること」は、それを問う自分自身が人間であるかぎり、「自分であること」を通してしか実証されえない。したがって「人間になること」もまた、それは「自分になること」を通してしか検証されえない。そうであれば、自分が「自分であること」の証すなわちアイデンティティは、自分が「自分になること」という体験のなかにしかないことになる。人格形成とは、結局は自己実現の謂いにほかならない。

そのような自己実現として「自分になること」は理解される。人間というものは種子として与えられた「いのち」を、実践ないし体験を通して、種子が実を結ぶように展開してゆくのである。そしてそのことを通して、自分らしさというものが形成されてゆく。自分らしさとは、具体的には、自分という存在のかけがえのなさを示す。かけがえのなさとは、他とは置き換えられない価値を意味する。自分は自分のために生きているわけである。

ところで、他とは置き換えられない価値というのは、決して他とは切り離された状態を意味しはしない。そもそも、かけがえのなさに至る議論の出発点は、あくまでも与えられた「いのち」ということにあった。その「いのち」とは、宇宙とのつながりにおいて与えられるものであった。したがって、宇宙とのつながりを想定しないことには、また「いのち」を与えるものという不可視の、人間を超えたものを予想しなければ、かけがえのなさということもありえないわけである。

「人間であること」すなわち人間性の基本は倫理にある。その倫理は、人間が「人間になること」という実践に基づいている。社会に流されるだけの人間、自分の人生の主人公になりえない人間には、「人間になること」という根本的な実践が欠けている。そのゆえに、彼らの倫理観は揺らがざるをえない。われわれの内なるスピリチュアリティは、そのことに対して警告を発し、かつわれわれ自身に方向性を示している。倫理を回復するには、与えられた「いのち」という視点に立つほかはない。そのことを問題提起しているのが、まさにスピリチュアリティにほかならない。

おわりに

倫理は、人間に与えられた課題として解釈される。「いかに生きるべきか」という問題は、与えられた「いのち」を他者との関係においてどう生かすか、種子にどう実を結実させるか、そういうかたちでしか論じることができないからである。現代という時代は、その倫理に反する状況、すなわち人間性の危機にさらされている。しかし同時に、新たな気付きが人間のなかに起こりつつある。その気付きは、これまで人間が無視してきたものに光を当てようとする。

これまで人間が無視してきたものは、基本的には次の三つである。それをキーワードで示せば、すなわち「不可視のもの」、「宇宙とのつながり」そして「誕生以前と死後」となる。人々の関心はそれらに向き、スピリチュアリティの概念が提起された。またそのことによって、新たな気付きに基づいて、これまでとは異なる新たな人間性が模索されつつある。それは、近代以降に失われてしまった宇宙的存在の再発見であった。しかもこの再発見は、単に理論の次元ではなく、実践ないし体験に基づくものであった。

スピリチュアリティに関する議論は、人間が「いかに生きるべきか」という倫理の問題と切り離すことができないし、また切り離すべきでもない。それというのも、スピリチュアリティには、闇の側面が存在するからである。これまで見てきたのは、主としてわれわれに一定の方向性を与えてくれるような、光の面のみである。スピリチュアリティが注目される背景には、近代における人間の社会的存在への一元化に対する批判があった。人間は本来的に宇宙的存在であるという気付きが生じ、その宇宙的存在の核となるのがスピリチュアリティであるとされた。

宇宙的存在の核としては、スピリチュアリティは具体的には、人間が「神秘」へと開かれている状態を示している。しかも倫理自体が、「いのち」を与えるものをどう理解するかということと密接に絡んでいる。その意味では、倫理は宗教ないし信仰と本来的に関係せざるをえない。いかに生きるべきかは、「いのち」を与えるものをどう表象するかという信仰の問題と無関係ではないのである。要するに、人間が宇宙的存在であると気付くことなしには、倫理というものも成立しえないということである。

ところが、近代に対する批判というものは下手をすれば、それに対する単なる反動になりかねない。単なる反動とは、人間が社会的存在でもあることを切り捨てて、宇宙的存在の面だけを強調することである。宇宙的存在のみが強調されれば、それは自分のために生きるということにほかならないから、必然的に他者の存在が見えなくなることに

帰結する。他者が存在しなくなれば、「いかに生きるべきか」ということも、もはや問題とはなりえない。スピリチュアリティの議論に、しばしば独りよがりの考え方が見られるのはそのためである。われわれが注意を心がけるべき点である。

人間が「人間になること」を離れてスピリチュアリティの議論をすることは、現代における人間性の危機以上に危険なことである。宇宙的存在に支えられた社会的存在、聖と俗とのバランスが肝心である。何となれば、人間は俗のなかでしか、基本的には生きられないからである。聖はその俗を活性化するものでしかない。人間にとって、聖なる世界は目的とはなりえない。なぜなら人間は、生きることがそのまま意味であり、価値であり、目的だからである。

注

(1) 「宗教・倫理・心理の観点」から包括的な議論を展開したものに、湯浅泰雄監修『スピリチュアリティの現在』(人文書院、二〇〇三年)がある。また、議論の最も新しいものとしては、人体科学会が企画した『科学とスピリチュアリティの時代』(湯浅泰雄他監修、ビイング・ネット・プレス、二〇〇五年)がある。

(2) 湯浅泰雄は論文「霊性問題の歴史と現在」(同右『スピリチュアリティの現在』、所収)において、「世界的な広がりをもつ現代の思想状況」との関連から、この歴史的経緯を手際よくまとめている。

(3) 筆者は「〈問題〉としてのスピリチュアリティ」(愛媛大学人文学会『人文学論叢』第四号、二〇〇二年)において、スピリチュアリティを「霊性」と訳すことの問題点を指摘してある。

(4) 実存主義としては、例えばキルケゴールにおける「単独者」の概念などを参照。

(5) 支配—被支配の図式において、被支配層のまとまりを防ぐために、それを「分割して統治せよ」という意味で使われる概念である。

（6）聖と俗の関係については、M・エリアーデ著『聖と俗』（風間敏夫訳、法政大学出版局、一九六九年）を参照。

（7）聖なるものについては、オットー著『聖なるもの』（山谷省吾訳、岩波書店、一九六八年）を参照。